



2012年12月26日放送

印象に残る症例②

斐川中央クリニック 院長 下手 公一

本態性低血圧症に伴う立ちくらみやめまい、ふらつきは日常診療の中で多い症状ではありますが、西洋医学的治療にせよ漢方薬による治療にせよ対処療法が主役で、低血圧自体に治療を切り込んで行く事はほとんどしません。高血圧に対する治療は大変進歩していますが、低血圧に対する薬のエビデンスはほとんどありません。

それは低血圧の方が長生きすると言われていたからで、私自身も神経内科を専攻していて、低血圧の人に血圧を上げる治療をするのは否定的でした。塩分を多く摂取すれば血圧は上昇するでしょうが、塩分を制限することが脳血管障害や心不全を予防する最も大切な生活習慣であり、最近特に神経内科医や循環器内科の間で強調されるようになってきました。ですから逆のことを勧めるのはどこかの臓器に障害が出てきそうで怖いのです。

低血圧に効果のある薬もほとんどありません。今回使用した交感神経を刺激する薬もなく、あまり効果が望めないのが現状です。実際に最高血圧が100前後のめまいの患者さんが来院された時には、真武湯や苓桂朮甘湯が効き、どちらかを処方しておけば困ることはほとんどありません。

西洋医学を主とする先生もベタヒスチンメチル酸塩を処方してごまかすのが大半です。

今回の症例はその様なごまかしの効かない症例で、低血圧に伴って腎血流が低下して、腎臓で十分に血液を浄化できなくなって腎不全になった若い女性です。根本的に血圧を上昇させる必要に迫られていましたが、一方で腎臓の機能も悪化しているわけで、塩分を存

分に摂取しなさいとは言い難く、せいぜい水分を沢山飲むように指導をするのが精一杯でした。

そこで、いろいろな漢方薬を試した結果、ある結論に達することのできた症例でした。

症例は46歳女性患者さんで、X年3月にふらつきと嘔気を主訴に来院されました。血圧は84/50と著名に低下して脱水状態でした。酸素飽和度も92%と低下していました。血液検査でBUN73.3、クレアチニン4.43と腎不全の状態でした。すぐに輸液を行い2日後には自覚症状は良くなってきましたが、BUNが58.9、クレアチニンが1.87と軽快するものの、依然として高い値が続くために近くの県立病院の腎臓科に紹介しました。そこでは血液検査が正常に戻っていたために、脱水による急性腎不全との診断でした。

それで脱水に気をつけて水分を十分に摂取するように指導して様子を見ていましたが、低血圧が続き最高血圧が75~90の間をずっとさまよっていて、4月にはふらつきがひどくなって再び県立病院を受診して5日間入院していました。退院後も毎日の様に輸液に通院しながら何とか自覚症状を改善しなくてはならない治療が続きました。

この患者さんは漢方医学的には極度の陰虚証で、脈は沈んで弱く細く、腹診でも腹力が弱く、小腹不仁と下腹部の圧痛も認めて臍上悸も認めた為に気虚を改善して気を巡らすことを目標にして5月より桂枝人参湯エキスを処方しました。すると最高血圧が80を保つ様になり、ふらつきも良くなってきて腎機能もBUNが25前後になり、クレアチニンも1.5程度を保つようになったので処方が続けていたところカリウムが2.6と著名に低下してきました。甘草による副作用を考えて真武湯エキスに変更して経口昇圧剤の塩酸ミドドリン4mgも投与して様子を見ていました。自覚症状はかなり良くなって真武湯エキスを気に入って内服していましたが、時々行う血液検査でBUNが45、クレアチニンが2と上昇してきたので、今度は大学病院の腎臓科に紹介して精査してもらいました。精査の結果、腎前性の急性腎不全でこれを繰り返していると、慢性に移行する可能性が高いとの返事で、十分に水分を摂取させて適宜点滴を行なってくださいとの治療方針を示されました。

本人も私も困ってしまいました。このままずっと点滴治療を続けるのは大変なことで本人にとって大きなADLの障害になりますし、何より今後も慢性腎不全に移行する心配を常に抱えて生きて行かなくてはなりません。

9月の中旬に食欲不振があり、気虚を改善して津液を増やす清暑益気湯を処方して低カリウム血症予防の目的でカリウム製剤も一緒に内服させたところ、最高血圧が常に90を保つようになり、時には100を超えることもあるようになりました。また、BUN、クレアチニンも正常値を継続するようになりました。

もちろん、自覚症状は全くなり、点滴も本人がどこかに出かける前などに行うくらいになりました。

長い医者人生を送っていますが、この患者さんへの清暑益気湯の効果は私にとって奇跡に近いもので、忘れられない症例となりました。

では、なぜこの頑固でたちの悪い低血圧に清暑益気湯が効いたのか考察して見たいと思います。

ひとつは、清暑益気湯に含まれる甘草のコルチコイド様作用の効果で、ナトリウムと水分が体に保持されて血圧が少し上昇しているという考えです。これがひどくなるとむくみが出て、高血圧にもなって偽性アルドステロン症になりますが、この症例ではあまりにも血圧が低く、低カリウム血症のみの副作用が認められ、カリウム製剤の補給で副作用を改善して丁度良い血圧を保てるようになったのではないかと考えられます。

この作用は間違いなく、本症例の血圧上昇に寄与していると思われませんが、その作用だけではないことが桂枝人参湯を使用した時との違いが証明されています。

それは、桂枝人参湯は人参、朮、乾姜、甘草、桂枝五味で、甘草は3g含まれていて、清暑益気湯の甘草は1gと少量です。なのに、実際の血圧上昇効果は清暑益気湯の方が高かったのですから、甘草のみの作用で血圧が上昇したとは言いがたいと思われま

す。清暑益気湯の原典は脾胃論にあります。条文の内容は現代の熱中症の特徴とほとんど同じ内容で、脱水で全身倦怠が認められ、体が重く動けないなどの症状が述べてあります。人参、黄耆で気を補って交感神経を刺激して、当帰、甘草、五味子、麦門冬、黄柏で津液や血液を増やして血圧を上昇させているのではと考えられます。清暑益気湯は、今までは夏バテの方剤で食欲を増して、気を益してくれるくらいにしか捉えていませんでしたが、西洋医学の点滴に匹敵するような方剤であると思うようになりました。

今回、清暑益気湯で難治性の低血圧症に伴う腎前性腎不全に著効した症例を経験できました。今後の低血圧症に対する治療に大きな指針となったと同時に清暑益気湯の熱中症に対する機序も考察できたと考えます。